東奥日報　2018年8月29日（水）11面　掲載

人の心揺さぶる普遍性

「アウトプット展」記録集

佐々木 隆

文化

郷土の一冊

この本は2015年の第1回「アウトプット展」の記録である。これは青森県の特別支援学校の造形作品を展示したものである。アウトプットとは、内に秘められて知られていなかったもの、隠れていたもの、気付かれていなかったもの を、作品として外へ出して、みんなで見ることである。

だから、特別支援学校では生徒たちがこんなことをしているという事実の報告ではない。記録は都合の良いところを寄せ集めたものでも、きれいごとでもなく、ありのままの真実を誠実に伝えようとするものである。

本の初めに支援学校の父母の方が、作品を見て、思いもかけず心を揺さぶられる経験をしたとあった。それは特別支援という特殊の枠の中に閉じ込められない、決して身びいきではない、誰にでも訴え、どんな人の心をも揺さぶる普遍性を持った作品であることに驚いたのである。それはいわゆるプロの芸術家でも難しいことだ。

本では関係者の示唆に富む言葉が多く語られている。障害を持った人たちの作品を評価する妨げになる無知と偏見があるが、無知に気付かせ解きほぐそうとしている。この本は障害者とか健常者という区別を超えたありのままの人間というものに気付かせてくれる。そのようなものになっているのは、美術教育の問題点への反省があるからである。美術とは何か、教育とは何か、それは今日の教育一般にも通じる。

このような作品をアール・ブリュットという。フランス語でアールとは芸術のことであり、ブリュットとは生（なま）の、野生のという意味で、アカデミックな教育や技術で描かれたのではない生の芸術である。これは20世紀になって認められた新しい芸術の分野であるが、日本の茶道ではすでに認めていたものである。

本で紹介されている作品には童心を感じさせるものがある。それは稚拙という意味ではなく、人間の本来の在り方としての根源性を示すものである。世阿弥の言った「初心忘るべからず」も、初めの決心を忘れるなということよりも新鮮な感覚を忘れるなということである。

市川新平の「ゾウ」は親と子のかかわりを示し、子どものゾウたちが語らっている声まで聞こえ、固まっていた心がほぐれ微笑が浮かんでくる。山内達也の「ザンダグロス」は紙で作られたロボットの姿に戦いに疲れた哀愁がただよう。成田健太郎の「風景」はシスレーの絵を基にしているようだが、シスレーの絵を通じてさらにその向こうにあるものを描いている。展示が素晴らしく、生きる力とは共に生きる力であることがよく分かるものである。

（東北女子大学教授）

※「どう見える？　生きる跡　アート　青森県特別支援学校発　造形作品展の記録」はアウトプット展実行委員会編、岩井康頼監修。弘前大学出版会刊、2484円。

※この記事は東奥日報社の提供です。
［ 問合せ先 ］弘前大学出版会
hupress@hirosaki-u.ac.jp
この画像は，当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです。